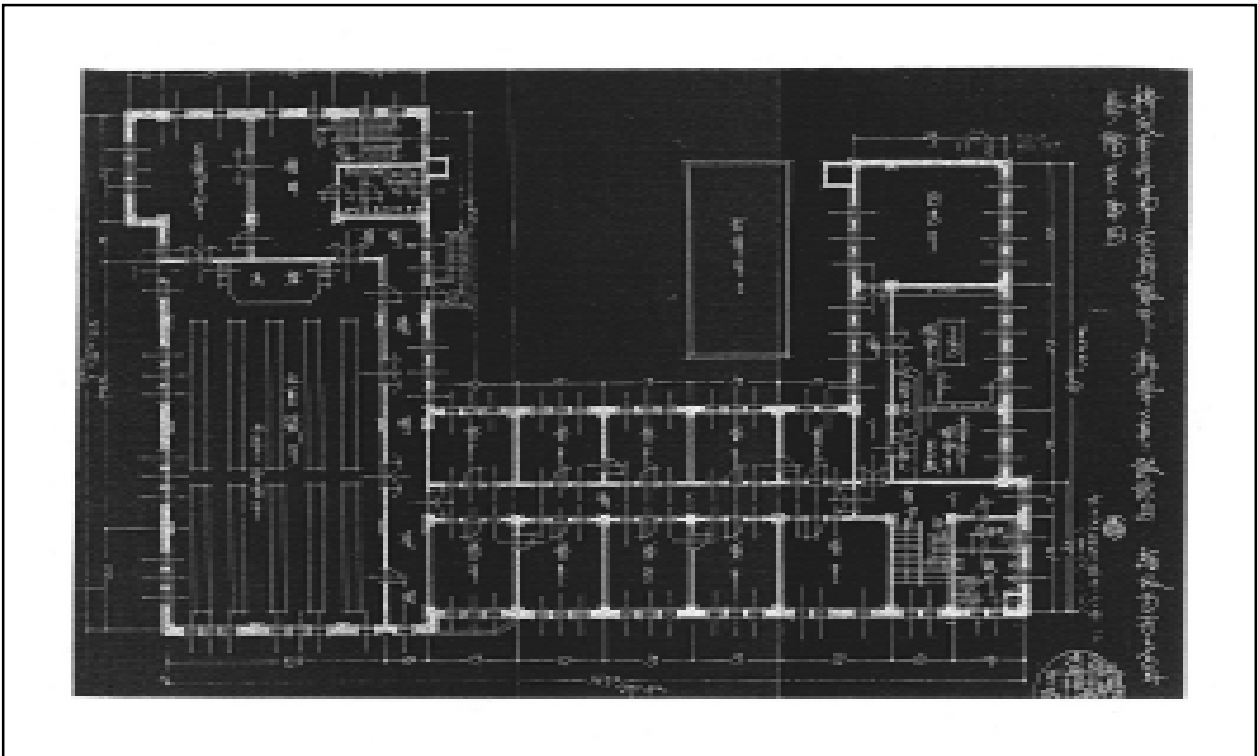


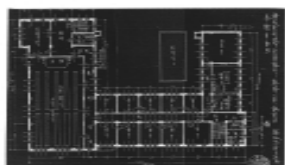
JIA news kinki



no.096/2005

冬号





表紙写真：第一合同銀行本店 三階平面図(原図)

建設当初の三階平面図には、大会議室兼貸室・会議室兼個室・図書室・娯楽室を除くと、建物中央部の10室は「貸室」と表記されていた。しかし、竣工後は銀行の用途に使われ、貸室としては利用されなかった。構造詳細図にはH型の鉄骨が表現されており、構造計画の原点に鉄骨鉄筋コンクリート造の構想があった。

CONTENTS

連載

「西国巡礼古道を歩く」	勝村一郎	3
「デザイントーク」	稲地一晃	5
「住宅部会通信2005」	高光良和	9
	國吉公一	10
「建築家の視点」	青井弘之	11
「都市点描」	宮川 武	12

情報

新入会員紹介	13
リレーエッセイ	井上 守 14
「編集後記」	大江一夫 14

地方に生きたアール・デコの建築家 - 薬師寺主計

その6 八階建て構想

中國銀行旧本店（第一合同銀行本店）は、大正13（1924）年の上期に新築の基本方針が決まり、正式に大原孫三郎から設計が委嘱された。すでに構想を温めていた薬師寺主計は、岡山の地に八階建てで、百貨店あるいは事務所などが同居する複合建築物という全く斬新で、思い切った図面を大原に提出していた。

当時のことを薬師寺は後日、次のように回顧している。

「岡山中國銀行本店の建築計画に当たりては、翁（大原）は筆者（薬師寺）の設計意匠を全面的に許容せられたのであった。その頃日本に於いては此種類の建築の慣例として金融機関の信用と威容を保持せしむるとの意味合いに於いて、石造の柱などまで外観を飾る様式の堂々たる単独建築であった。全く資本の固定した経済観念を無視した、贅沢な建築であったのである。中國銀行の最初の計画は耐火耐震の八階建てで実用を主とする構造となし、銀行は一二階と地下室のみを使用し、二階以上の他の部分は百貨店または貸事務室に利用し、資本の回収と償却に充てる米国的な合理的な設計であったのである」。

しかし、この計画は日の目を見なかった。深刻な金融不況の中で、中央監督庁の理解と許可が得られず、三階建ての設計に変更せざるを得なくなった。薬師寺に言わせると「不幸頑冥なる中央監督当局の理解と許可を得るに至らず、遂に現在五階以上の頭をチョン切った、中途半端の建築となった」のである。

八階建ての建築計画案が生まれた背景は、大原の信頼と財力でもあるが、建築的に二点ほど考えることができる。一点は、薬師寺が東京市小石川区林町（現・文京区千石）の自宅から、大原がいる倉敷まで通っており、

東京駅前に建ち始めた丸の内ビルディング（大正12年、地下1階地上9階建、三菱地所部設計）や日本郵船ビルディング（同、7階建、曾禰中條事務所）等の東京における高層建物の建築事情を把握していること。もう一点は、構造に関する知識として、これらの設計者らとも面識があり、当時の構造学の第一人者であった東京帝国大学教授佐野利器らとの深い交流から、いち早く構造界の動向を陸軍技師として入手できる立場にあったことである。

参考文献：上田恭嗣「アール・デコの建築家薬師寺主計」山陽新聞社2003（ノートルダム清心女子大学人間生活学部教授 上田恭嗣）



八階建て想像図

西国巡礼 古道を歩く

連載 第8回

大和の街道

【上ツ道、中ツ道、下ツ道】

勝村一郎

(勝村建築設計事務所)



古道に続き、今回は平城京遷都に伴い飛鳥と平城京を結んでできた街道について書きます。これら3本の街道は、藤原京の外郭を基本として平城京の条里制を施行する為に造られた官道で、東から上ツ道、中ツ道、下ツ道と呼ばれ大和盆地の中央部を南北に約2キロ間隔で並行に走っており、特に中ツ道・下ツ道は20キロに及ぶ直線で平城京の東京極と朱雀大路につながっている道です。これらの3本の街道は近世まで大和盆地の幹線としての機能を果たて来ました。2005年11月の始め、上ツ道とみられる盛り土遺構が、奈良県桜井市箸中(はしなか)の水田で見つかった、との報道が記憶に新しく、おおむね7世紀に造成されたとされています。

上ツ道/奈良から桜井に至る7世紀頃からの南北の古道で、近世の上街道の前身。現在の県道はこの道のバイパスとして造られたものです。南に行くと安倍山田道となり明日香へ通じ、桜井では初瀬街道と交わって平安時代以降には初瀬詣に利用されていたようです。桜井を東に行くと伊勢道につながって、現在も主要な道路として利用されています。

中ツ道/上ツ道の西側に平行して走る上ツ道と同時代の古道。竹内街道に連なる横大路と交差して藤原京のあった橿原市高殿町を経て、明日香村の橋寺に至り、吉野道に通じる道だったので別名「橋街道」とも呼ばれていました。平安時代の主要な道で、藤原道長がこの道を通って吉野詣をおこなったと云われています。現在、田原本以南が一部消滅して畦道に僅かに痕跡をのこしています。

下ツ道/中ツ道と平行に南北に走る。現在の国道24号とほぼ合致していますが、見瀬町あたりから屈曲しながら明日香村に入っています。

下ツ道を北へ延長すると、歌姫街道から宇治・山科を経て近江までつながり、後の国道の元になった古道です。

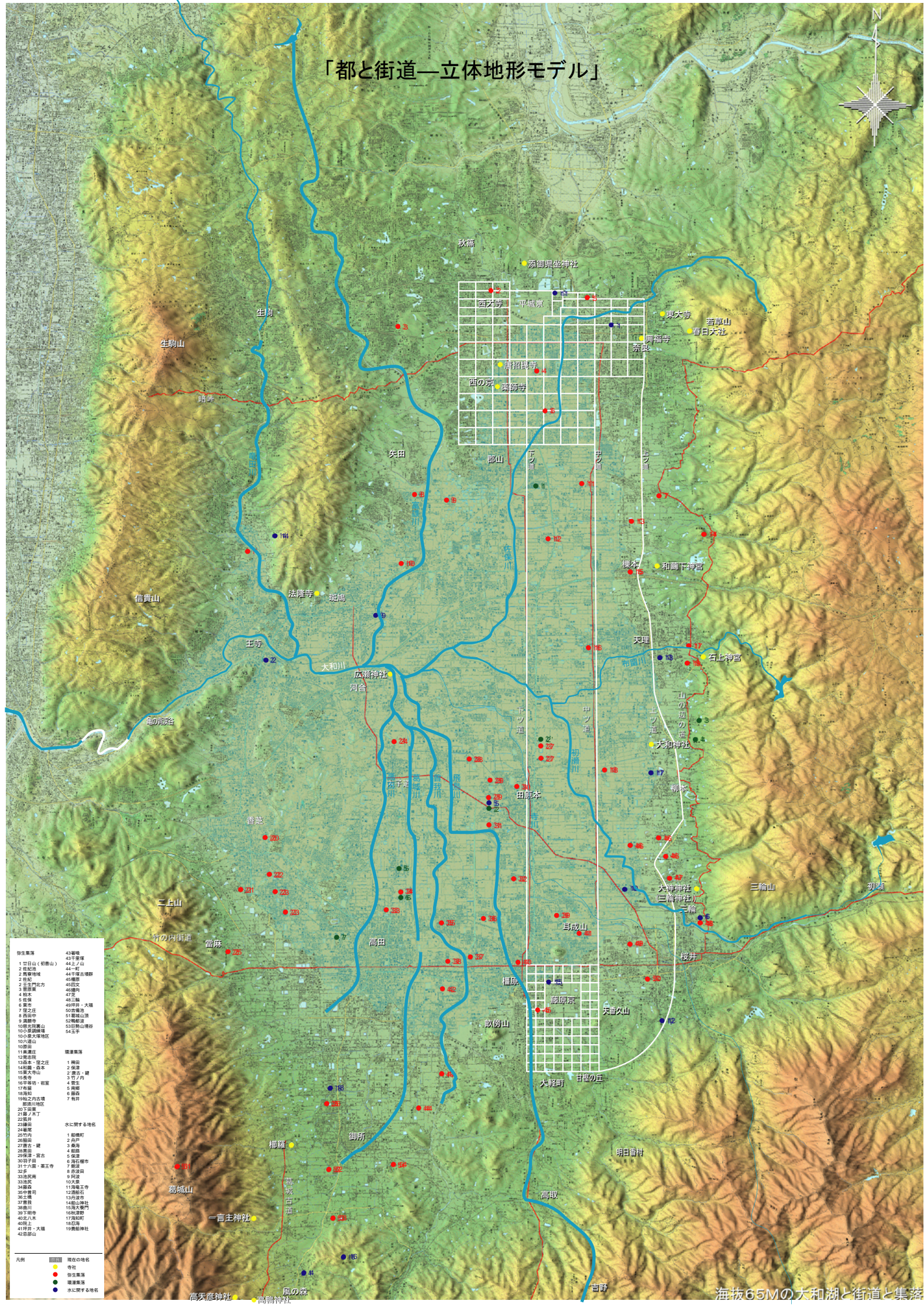
地図でわかるように下ツ道、中ツ道は平城京築造の目的で造られた都市計画道路であるのに対し、上ツ道は最古の道と云われる【山辺の道】の少し西の麓を地形に添って走っています。大和平野を一望できるこの道は都ができる以前から点在する集落を結ぶ生活道路であったと推測できます。

上ツ道のスタート地点は興福寺・猿沢池。暗峠(くらがりとうげ)超えの大阪街道と京都街道の交差点です。南に歩くとすぐ奈良町に入り、京終(きょうばて)で奈良町をでます。南にまっすぐ帯解(おびとけ)・檜(なら)・榎本(いちのもと)を通り東に迂回して天理石上(いそのかみ)を回って柳本集落に着きます。三輪山を前方に見ながらゆるい登りを三輪にさしかかる頃には右前方眼下に大和三山が、はるか西方に二上山・葛城・金剛の山並が一望できます。まき向遺跡や箸中に至る古墳群を抜けて桜井に入り、右に曲って八木町に至ります。八木町は藤原京の北端、伝建地区の今井町は西端に位置しています。この位置は西に竹内峠を越えて大阪、南に吉野を越えて熊野、東に初瀬・室生を越えて伊勢をめざす要所でもあります。

下ツ道のスタート地点は平城宮跡。現在の四条大路・都跡を抜け、西九条羅城門跡を通り佐保川の堤防に添って南下すると環濠集落で有名な郡山の稗田集落に出ます。伊豆七条町を抜け牛頭神社、二階堂集落、庵治集落、唐古遺跡、田原本と進むと右に二上山、左に三輪山、前方に大和三山が見えてきます。横大路を過ぎれば八木町です。

奈良時代初期にできたこれらの道は、直線であること、中世から現代に至るまで大和平野の主要な街道として集落・社寺・遺跡を結ぶ幹線であったことなど、他に類を見ない街道といえます。

「都と街道—立体地形モデル」



- | | |
|-----------|--------|
| 弥生集落 | 43番地 |
| 1 竹田山(新山) | 43千尋塚 |
| 2 佐船港 | 44ノ山 |
| 3 高野山 | 44ノ町 |
| 4 佐船 | 44ノ高野山 |
| 5 佐船 | 45番地 |
| 6 佐船 | 45番地 |
| 7 佐船 | 45番地 |
| 8 佐船 | 45番地 |
| 9 佐船 | 45番地 |
| 10 佐船 | 45番地 |
| 11 佐船 | 45番地 |
| 12 佐船 | 45番地 |
| 13 佐船 | 45番地 |
| 14 佐船 | 45番地 |
| 15 佐船 | 45番地 |
| 16 佐船 | 45番地 |
| 17 佐船 | 45番地 |
| 18 佐船 | 45番地 |
| 19 佐船 | 45番地 |
| 20 佐船 | 45番地 |
| 21 佐船 | 45番地 |
| 22 佐船 | 45番地 |
| 23 佐船 | 45番地 |
| 24 佐船 | 45番地 |
| 25 佐船 | 45番地 |
| 26 佐船 | 45番地 |
| 27 佐船 | 45番地 |
| 28 佐船 | 45番地 |
| 29 佐船 | 45番地 |
| 30 佐船 | 45番地 |
| 31 佐船 | 45番地 |
| 32 佐船 | 45番地 |
| 33 佐船 | 45番地 |
| 34 佐船 | 45番地 |
| 35 佐船 | 45番地 |
| 36 佐船 | 45番地 |
| 37 佐船 | 45番地 |
| 38 佐船 | 45番地 |
| 39 佐船 | 45番地 |
| 40 佐船 | 45番地 |
| 41 佐船 | 45番地 |
| 42 佐船 | 45番地 |
| 43 佐船 | 45番地 |
| 44 佐船 | 45番地 |
| 45 佐船 | 45番地 |

- 凡例
- 現在の地名
 - 神社
 - 弥生集落
 - 高野山
 - 水に関する地名

海拔65Mの大和湖と街道と集落

デザイントーク 2004年度 第6回 (2005 / 1 / 26開催)

【評者】・出江寛(出江建築事務所)・稲地一晃(建築計画INACHI)・木村博昭(神戸芸術工科大学)
・高砂正弘(梅花女子大学)・横川隆一(横川設計室)・吉羽裕子(I.F.A)・吉村篤一(建築環境研究所)

山下和希氏 / アトリエ・アースワーク

・ Full Bloom hana

・ WG OOMIYA

「田舎にあっても都会の空気感を味わえる建物をつくりたい。田舎に住む若者に都会的な雰囲気を感じられる、若者の活力がわくようなデザインを提供したい。」山下氏の主張である。

美容院Full Bloomhanaは蜜柑の町、和歌山県有田市にある。建物周囲を果樹園に囲まれ、建物背後に見える山にも5月には蜜柑の花が咲く。自分達の技術を外に見せたいという施主の要望から、道路に沿って開口部がとられ、両サイドにはRCの壁があり、トラスで陸屋根を支える構造となっている。来客者は車を利用する人がほとんどである。

宝石店WG・OOMIYAは和歌山県田辺市の駅前にある。5階建てビルの1階部分の改修である。テナント契約解消時に現状復旧が求められたため、もともとあるビルの外装のイメージを残したまま、スチールと溶接金網で割栗石をいれる特徴のあるファサードを形成した。開口部を限定し防犯性を重視している。閉店後の夜間にはカラーキメティックスを使いファサードが様々なパターンに照明され、駅前の待ち合わせ場所として利用されているとのことである。



デザイントーク

プレゼンテーションの冒頭に立地場所である和歌山県の、橋杭岩や有田川などの風景写真が提示された。そういった和歌山独自の風土に根ざしたデザインがされているのかと思ったが、どこかアメリカの郊外にでもありそうなデザインである。例えば、室内を通して背後の山の景色が抜けて見えるなど、景観にシンクロしたファサードができれば建物としての価値は増すのではないかという意見が出た。吉村氏は、緑がある周囲のなだらかな景観に対しては、陸屋根ではなく傾斜のある屋根の方が景観にマッチした落ち着いた建物ができ、緑のある所には屋根を架けるよう心掛けているとのことである。田舎に住むものにとって、都会的な雰囲気に対する憧れは確かに現存する。しかし一昔前のような、盲目的な都会に対する憧れというものはあるのだろうか。むしろ田舎の持つ独自性に気付きつつある若者は多い。田舎に住む人が忘れかけた風土性を再発見し、地域の持つ価値を再発見させてくれる建物こそ本当の活力につながるのではないだろうか。田舎は素材の宝庫であり、景観は歴史の積層である。



デザイントーク

西峯隆司氏 / 福本設計

- ・ 奈良市音声館
- ・ なら工藝館

歴史と文化の香り高い町並みが残る奈良。景観をどのように理解し、その上で作り手としてのデザイン行動により、どのような街並を形成するのか。受け継ぐ時の手法はどうあるべきか。普遍的な問題が多角的に議論され興味深いものとなった。

音声館（おんじょうかん）は、元興寺の門前町である奈良町に位置している。軒の低い切り妻屋根の建物が多く残る、歴史文化財に囲まれた場所である。そこに20年前から続くわらべ歌教室や市民劇団、音楽療法の活動拠点として、地域の町作りに貢献する施設として計画された。

館の構成は、伝統的な建築様式である「表屋造形式」を基本に、分棟形式を採用する事により、ボリュームを小さくし、街並に溶け込むことが意図された。また、周辺の街並が持つ幾重にも重なった勾配屋根の美しさを損なわない形が求められた。

「表屋部」には、エントランスホールとギャラリー、「玄関棟」には集いの場から、学びの場へ自然な形で人々の心を変化させる中庭、「主体部」にはプレイルームとホールが配置されている。外壁は打放しと漆喰により仕上げられ、住宅密集地のプライバシーに配慮した開口部の構成となっている。

工藝館は奈良町の西の玄関口に位置し、新設の16M道路に面して61Mの間口を有し、今後の景観形成に対しても重要な場所に位置している。墨・筆など天平時代から続く奈良工芸の理解を深め、交流がうまれる開放性と創作の場を提供する施設として計画された。工芸品の素材である石・土・木・金属等が持つ深みや陰影を包み込む施設とし、建物自体にもそういった素材を用いる事で街並をリードしていくことが意図された。シャープな部分を含め陰影のあるディテールが追求されており密度は高い。建物の構



デザイントーク

成としては、メインギャラリー、ロビー、貸しギャラリーをスロープでつなぎ、2階には実演場、研修場があり、それらが回遊性のある動線でつながっている。

両建物とも、屋根には瓦を用い、伝統的な形を尊重し、街並に調和させるという目的は達成されたと言える。外見的には成功しているが、内側は成功したと言えるのか。音声館のメインの空間であるホールへ向かう高揚感や、エントランスホールに入った時に感じる豊かな空間といった印象はあまり感じられなかった。勾配屋根でありながら内部空間にはフラットな天井が貼られ、伝統的な建物がもつ構造と空間の一致が追求されたとは言いがたい。

工藝館の東側に隣接して、妹島和世氏設計の商業施設が建っている。ガリバリウム鋼板を用い、挑戦的な形態が衆目をあつめ、伝統的な街並との調和を重視した工藝館とは対比的な景観をなしている。

伝統的な形を重んじるあまり、新しい街並の展開が途絶えてしまうことにも問題があるが、周囲の環境の文脈に対しどのような態度をとるかというのも設計の大きな課題と言える。

例えば、妹島氏設計の金沢21世紀美術館の他、ポンピドゥーやグッゲンハイムも、古い街並の中にありながらあまり違和感はない。なぜなら建物の周囲に十分な広さがあるからだ。そこまで議論が至り、最後に出江氏が、モンドリアンの美学を引用して話された。

「モンドリアンの美学では美は等価・等質でなくてはならない、恒久、抽象化でなくてはならないと言った。例えば、35、6才の女性と5、6才の男の子がキッスしてもお母さんと子供という構図だが、35、6才の女性と同年令の男性が接吻しかかると、はっとしてみんな注目する。これは男と女という等価等質の物で価値が対立して同じ力を持っているから。そこに空間という広がりの中に色気が出てくる。この色気の事を『間合いの美学』と世阿弥が言い、間合いが大事だと言っている、間合いを面白くするためには対立するものの二つが等価等質でないといけない。・・・モンドリアンの絵には赤青黄を等価等質にするために大きさが異なっている。そして間合いは黒い線で区切られていてバランスが良い。妹島さんのこの作品にはその間合いがなく古い建物に近接している。建築単体として良くて、景観としてはまずい。間合いが必要である。」



住宅部会通信 2005

建築への旅

担当世話人：高光良和 / 竹原義二

高光良和

(高光良和建築事務所)



7月例会は講師として、住宅部会会員、竹原義二氏にスライド講演会「建築への旅」をして頂きました。会場には、約80名を超える方々に集まって頂き、TOTOテクニカルセンター始まって以来、最大規模の集会とのこと。光と影、素材の力強い表現のいつもながら美しい作品で、今回は2例の公共建築物の紹介がありました。

まずは、和歌山県橋本市での「あやの台保育園」。小泉内閣の政策の一つとして、幼稚園と保育園を合築しようといった法案のもと、建てられたとのこと。クリアしなければならない難しい課題が山積みだったそうですが、出来上がりは子供達にとって優しさに包まれた、美しい建物でした。もう一例は、同じく合築計画で、「オープンスペースれがーと」。(知的障害者デイサービス / 高齢者サービス / 地域交流スペース)と何やら難しい複合施設の様ですが、出来上がったものは、大変優しい建物でした。竹原氏言わく、「住宅をベースに施設づくり」をすることが今後増えていくであろうと。私達、JIA住宅部会のメンバーにも多に腕を振るって頂きたいとのことでした。

ひと呼吸おきまして、次のスライドは、竹原さんが最近旅で見つけた「美しい建築のヒント」(『美しいという言葉には人の心が含まれているが、きれいの反語としては汚いしかないよね・・・』とおっしゃっていました。)をテーマにお話して頂きました。バリのアマンキラホテルのプールと海の水が一体となって広がって、吸い込まれていく美しい写真からスライドが進みました。隈研吾さんの「馬頭町広重美術館」での天井ルーバーのデザインの根元にバリの竹天井があったことを発見した時、非常に嬉しかったそうです。旅で出会った美しい素材、古い文明の石組み、ガラスにうつる風景、水にうつり込む空、ニューヨークの摩天楼、イスラムの建築。

旅する地域、文化、風土が違えども、スライドからうつし出される写真に、竹原さんの建築を見ているような世界に浸り、また心新たに、美しい建物を作る力を得ることができました。会場にお越し頂いた方々も同じ気持ちであったと思います。



住宅部会通信 2005

8月例会のご報告

担当世話人 蔭山幸紀 / 國吉公一

國吉公一
(國吉設計事務所)



8月の例会は、京都で皆さんにゆっくりと夏のひとときを過ごして頂きました。日頃、雑事に追われる我々の仕事ですが、一服の清涼感を味わって頂いたかも知れません。数名の参加を頂き、美術館や南禅寺を散策して来られた方もいらっしゃった様で、広い庭園の奥座敷での京料理と京豆腐の夕刻からの宴となりました。少し心を砕いて話は弾んでいた様ですが、やはり建築の話になると、皆敏感になり議論も活発になるのが我々の本性でしょう。しかし場所と雰囲気です。セミナーや会議とはまた趣を異にした、なごやかな内に心地良い時間を過ごせたのではないのでしょうか？

私も午前中は京都市内での「建築と子供たち」で暑中の街歩きの後での参加でしたので、世話人ながら適度な疲労感と共にすっかりくつろいでしまいました。毎日顔を見合わす訳ではないのですが、やはり同じように建築に心を尽くす仲間の方々とどこか安心感を持って本当の懇親の意味でおつきあいできるのが、この部会の何よりの良い所ではないかと感じ入りました。最後は皆さんに京都に来て良かったと言って頂き、世話人としてもほっとした次第です。



近畿支部大会 住宅部会 作品展

ReDesign : 自然と潤いを取り戻す

今回の作品展は、堂島アバンザのエントランスホールで開催されました。高層ビルの1階で、本屋さんやカフェもありビルを出入りする人達が行き交う、最も都会的な感じのする場所でした。大西さんや生山さんの企画により、作品を透明アクリルでサンドイッチした展示方法は、シンプルで単なるパネル展示でも場所にもピッタリ感じがしていました。

会員の気持ちのこもった作品は、じっくりと一作一作見て行くに十分な迫力があり好評だったようです。会員の作品を展示する事で、社会にアピールすると共に、会員相互の数少ない作品を通しての交流の場となり、毎年毎年続けられて行く事の意義があるのではないのでしょうか。京都からの参加者が無かったので、終盤に急遽私も飛び入り参加した次第ですが、今回の支部大会にもリンクした「自然と潤いを取り戻す」というテーマは都市向けの発信としてこの場所ならではの効果が期待できたのではないのでしょうか？



「生活とともに 保存する姿勢」

青井弘之

保存再生委員会（内井建築設計事務所）



大阪府堺市の南東部、いまでも農村風景が残る地に、江戸時代から続く豪商の屋敷が兒山（こやま）家住宅です。平成14年に登録文化財となりましたが、今日までの過程は単純ではありません。この兒山家は、江戸時代後期に分家された住宅で、本家住宅のほうは残念ながら今はありません。

本家住宅の保存問題が転機となり、兒山家ご当主万珠代さんは、当住宅をなんとか保存維持していく方向を模索されることとなりました。とはいえ、敷地800坪、築160年以上の、母屋をはじめ長屋門から蔵にいたる数々の建築群からなる大邸宅を、維持していくだけでも容易ではありません。またご当主は単なる保存の問題に終始するのではなく、地域の文化財ともいえる本住宅を周辺の文化活用にも生かしたいという思いをお持ちでした。

そうした中で、建物の一部をこの地域の古からの農具等を展示、紹介していくために一般に公開していく拠点となるよう、市民らの、「ナヤミュージアム」づくりという、手づくり美術館構想の骨格が生まれ、展示室への施設整備とともに自分たちによる保存再生ワークショップとも言うべき体制が自然とできあがってきました。参加される人たちは、はじめに指導して下さった地元の棟梁さん、会社員、小学校の先生、市の職員、主婦のかた、様々です。私も昨年春、当初からこのワークショップに参加しています。

まずは棟梁さん指導のもと、土塀の土壁補修からはじまりました。なにせ塀だけでも全体で100mは優に越える長さがあります。はじめの土は敷地内での別の壁に使われていた壁の土。まさに再生。土手をつくり藁をませ長靴足で踏む。小学校の児童さんも参加されました。実際やってみると、藁の長さはこれでいいの

か？しばらく置いておくと良いというのがこの黒くなるのは大丈夫か？など自分たちの手でやってみてならではの経験があります。いざ左官は慣れればできるものだという実感。塀がすめば納屋の壁。竹木舞の編み方。とはいっても以前のやり方も案外いい加減。こうしたほうがいいかなとか臨機応変。秋には裏山で竹を伐採し、木舞用の竹の準備。竹は伐採したすぐに割っておくべきと学習。勢いづいて、展示室となる納屋の床の仕上げについても、三和土がいいけれど予算がない。では自分たちでやってみよう、といった具合に進んでいきます。指導うけた上でみんなで木槌でまさにたたく。高価な仕上げといわれてしまってきたこういった仕様も実際にやってみて実感。うまくいなくてもまたやればいい、ご当主自ら実験精神で心強い。次の課題は外壁の焼き板をみんなで本当に焼いてつくろうとしています。

建築家というよりかは三流大工として参加している私も、このご当主自ら保存再生活用に向け、中心となって動かれている姿に魅せられている一人です。その人柄に引き寄せられて実に多彩な方々が集まってきています。なによりこの兒山家住宅そのものが寵ももちろん現役の、生きている住宅においてのアクションが嬉しいことです。

建築単体だけでは開けない保存再生の問題も、こうした広く地域の文化の活動の一環の中で捉えてみる可能性の実例を感じています。



兒山家住宅母屋正面



地元小学生も参加の土壁ワークショップ

既成市街地における 通りの街並みを揃える



宮川 武

(都市問題経営研究所)

既成市街地の中で、通り（道路）に面する建物の軒や高さ、屋根、外壁のデザイン処理（色、テクスチャー等）等、通りから見える街並みや景観を形作る部分について、良好な調和の取れた見え方になるように、通りに面するそれぞれの建物や構築物について、なんとなく、きれいにしたいと思います。

方法としては、皆さんご存知のように、建築基準法に基づく建築協定、都市計画法に基づく地区計画、景観法に基づく景観協定、都市によっては条例に基づく景観や街づくりの協定、他に、は任意の協定、申し合せにより、進めることが考えられます。

しかし、現実には、任意の協定以外は、法律等による規制の網がかかるため、不動産のフレキシブルな利用価値を前提に考えると、土地所有者等の関係者さんの同意はそう簡単には行きません。

現に、建築協定や地区計画は、開発された住宅地に多く、土地の売買時点で既に決められて成り立っているところが多いです。

揃ってれば魅力も増すであろう商店街を見ると、商店街は自然発生的に商店が集まり集積となったところがほとんどですから、ニュータウンを除いて最初からそのような規制誘導措置はありません。

従って、協定を締結しているところがあっても、任意の協定となっているところが、私の知る限りではほとんどです。

ただ一つだけ知っているところでは、建築協定を締結されているところがあります。金沢にある豎町商店街です。ここは、通りに面して庇をある一定の位置につけるように建築協定がなされています。これだけの協定ですが、それでも関係者の方々がよく同意されたと思います。



豎町商店街
(金沢市)
統一的な庇

何かの街並みに関する書籍で見たのか、江戸東京博物館で見たのか、忘れてしまいましたが、あの浅草の仲見世ですが、昔も街並みが統一されています。記憶に残っているのは、錦絵みたいなもので江戸時代に描かれたものだったのですが、今の仲見世の街並みの雰囲気と変わらない絵があり、コメントには、「ここで店をするものは統一的な街並みを形成するように決められている」とあったように思います。

つまり、いつの時代も、最初からこういう風に街並みを作っていくという取り決めがあって、それぞれが建物を建てて行かないと、建物がある程度建った後では、ほとんど無理ということでしょうか。ちなみに、江戸時代の仲見世は、浅草寺の境内で、地主はお寺ですから、そういうことができたのでしょう。

思うに、既に建物が建ったところで、通りの街並みを揃えるのは、理屈ではできますが、進めるのは、何か動機付けがないと、非常に困難だということです。

そして、もし動機付けがあるとしたら、これは経験ですが、街路拡幅による再整備費用的なものの手当てとか、商店街のお店や通りに面する建物の統一的ファサード整備のための補助とか、そういうインセンティブがあれば、街並み形成のための修景、修復が少しはし易くなるということです。

新入会員紹介

大阪府 川原村勝幸 安井建築設計事務所
大阪府 真野 覚 ARCHIXXX 真野サトル建築デザイン室

JIA近畿支部大会 / 建築祭2005大阪

～「ビオトープ」な美しい街づくり～

11月2日(水)～11月30日(水) メイン大会11月2日 報告

今年度のJIA近畿支部大会は、綿業会館をメイン会場に基調講演・式典・各種表彰・セミナー・資格制度シンポジウム、また会員による建築展2005及び住宅作品展を同時開催しました。

大会の幕開けとなるメイン大会には小倉会長にもご出席いただき、資格制度シンポジウムではパネリストとして参加いただきました。

基調講演をはじめ式典・表彰各種、第八回関西建築家大賞の表彰・鼎談では立ち見ができるほどの盛況ぶりでした。

また、新たな試みとして「建材メッセ」をメイン大会と併せて開催し、33社の賛助企業に出展いただき、参加者の方々がプログラムの合間に足を運んでいただく姿も見えました。その模様を本誌にてご報告させていただきます。

次年度は近畿支部(奈良地域会)担当で11月9、10、11日(予定)に奈良県で全国大会を開催する予定ですので、会員のみなさまのご協力をよろしくお願い申し上げます。



オープンジュリー学生コンペ
審査風景



資格制度シンポジウム



技術フォーラム講演会



技術フォーラム船内



関西建築家大賞鼎談



懇親パーティ



建材メッセ会場



建築展2005そねちか広場会場



子供絵画展会場



住宅作品展アバンザ会場

リレーエッセイ

船場の町割り - 3

40間四方の街区が「背割下水」により南北に2分され、東西方向が7軒程度に分割されるため、船場地区の標準的宅地は東西6間・南北20間程度であることは前回の述べた。この「標準的宅地」には小規模なオフィスビルが建設されることが多かったが、最近では都市的な小規模集合住宅もよく見られる。建築家にとっては創作意欲のそそられる敷地ではあるが、完成された建築群を見ると残念ながら落胆させられることが多い。町の骨格がしっかりしているだけに、建築家としての責任は重大である。

一方、宅地が集合されて大規模開発されたエリア（国際ビル・丸紅ビル他）は、40間四方の敷地全体を活用した開発である。船場地区では、この単位が開発の最大単位であると言える。こういった開発の場合、本町通・堺筋等広巾員道路に面する側はそれほど問題にならないが、従来の巾員の通り・筋に面する側の扱いは工夫のいるところである。

最近では、この大型街区の半分の土地でも超高層マンションが建設されている。秀吉が残し、大阪の個性の一つを形成している町並みに対する本来の「都市デザイン」の視点と議論が必要であると痛感する。
(井上 守)

編集後記

近畿支部大会/建築祭2005大阪も終了し寒気が肌をさす師走に入りましたが、街なかにはまだ紅葉が鮮やかに照り映えり、地球温暖化が進行しているなか年々暖かさを感じる今日この頃です。そねちか広場での建築展は今回で3回目となり、各種催しも含め約60名の建築家の作品は毎回見応えのあるもので、約3000人余りが来場される会場では建築家の活動を一般市民にも広く理解して頂くよい機会になりました。

しかし、世間を騒がせている社会的責任を欠く某建築設計事務所による構造計算書の偽造問題のようなことがありますと消費者からの建築設計に対する社会的信用が失われてしまいます。設計業界としても消費者が欠陥を掴まされないためにもさらに倫理規定を整備し、今一度、建築基準法の目的である「国民の生命、健康及び財産の保護を図り、もって公共の福祉の増進に資すること」の責務を再認識し、違法に対して厳格な審査処分を行ない、社会的地位の向上に資さなければならぬと考える次第です。
(広報委員 大江一夫)

広報委員会

委員長 小南一郎（大阪）
副委員長 小池啓夫（大阪）
委員 足立成美（京都） 一尾晋示（大阪） 井上 守（大阪） 太田恭司（大阪）
木戸口浩之（京都） 瀧川嘉彦（和歌山） 佐々木純一（大阪）
佐藤洋司（大阪） 柴田敬四郎（奈良） 内藤 正（滋賀）
森崎輝行（兵庫） 横関正人（大阪） 大江一夫（住宅部会長）
事務局 穴井宏樹 木田明生 緒方英輔
発行日 2005年11月30日（冬号）
発行人 出江 寛
発行 社団法人 日本建築家協会近畿支部
〒541-0051
大阪市中央区備後町2-5-8 綿業会館 TEL06-6229-3371 FAX06-6229-3374
ホームページ <http://www.jia.or.jp/kinki>
メールアドレス jia@bc.wakwak.com

表紙 第一合同銀行本店 三階平面図(原図)(撮影:上田恭嗣)